

ここはちゃんと挨拶をした方がいいんだろうなと思って、俺は頭を下げた。

「：初めまして、藤原と申します」

「うちは客に自己紹介させるルールはないぞ」

「憎まれ口叩かない。俺の友達だから自己紹介したの。普通に挨拶してよ」

鏡が促すと、渋々といった感じで店主はこちらに会釈してくれた。

「夏八木だ。こいつが無理言つて連れてきたんなら、適当に帰つていいんだぞ」

本当に商売つけない人だな。

でもこういう飾りのない人の方がいい。

「今鏡が言った通りです。興味のあるものがあれば買わせていただきます。彼がここにあるものが面白いつて言うから見てみたかったです」

「自主的なら問題はないさ、ゆっくり見ていきな」

「はい」

お言葉通り、見させてもらおうと二人に背を向けて商品棚に向かおうとした途端、誰かが俺の背後から

抱き着いた。

「鏡」

「うわっ！」

頭の上から響く声。

強い力。

突然のことに心臓が跳ね上がり、驚いて振り向いた視界に入る金色の髪と整った外国人の顔。

ドキッとしてしまうほどのハンサムだ。

「ユージン、人違い。それ俺の友達だから」

鏡の声に、その男性は彼と俺とを見比べ、慌てて手を離してくれた。「鏡」と呼んだことからして、俺と彼とを間違えたのだろう。

彼が離れても、俺の心臓は驚いた時と同じようにドキドキしていた。

「ごめん、ごめん。夏八木と話してるから、てつきり鏡だと」

外国人に慣れていないわけではない。大学には外国人の講師もいるし、少ないが留学生もいる。

慣れていないのは、人に抱かれることだ。家族とでさえ、もうずっと触れ合うことなどしていないのだから。

「俺だったとしても、背後からいきなり抱き着くのは反則。自分の身体の大きさを考えてよ」

「その通りだ。ペナルティーだぞ、ユージン」

鏡と夏八木さんと、二人に怒られて彼はすまなさそうに頭を下げた。

「すみません」

身体は俺なんかより大きいのに、まるで叱られた子供のようだ。

「ごめんね、驚かせたね。えっと……」

青い目が俺を見る。

その目に、また胸が鳴る。

「藤原。俺の友達。藤原、その人はユージンさん。夏八木さんの友達」

俺が答えるより先に、鏡が奥から二人分の大雑把な紹介をした。

「……どうも。藤原です」

改めて自分で名乗ると、綺麗な顔でにこつと笑う。

「おびえさせちゃったかな？」

「当然だ。お前みたいなデカイガイジンに抱き着かれたら普通驚くもんだ。すまなかつたな、ボーヤ。駄目な悪い犬で」

意外だな、夏八木さんが『すまなかつた』と言うなんて。風貌からは、もつと他人に関心のないタイプかと思つたのに。愛想はないけどいい人なのかも。

「あ、いえ。突然だからビックリしただけです。鏡、俺、店の中見るから」

俺はまだ傍らに立っているユージンさんから逃げるように店の奥へ向かった。

離れてから、気づかれないようにちらつと三人を見る。

鏡は奥に入ってしまったところからは見えないが、カウンターに座っている夏八木さんとユージンさんを見てると、ちよつと不思議な感じだ。

店の雰囲気もあるのだろうけど、そこだけ異空間だ。背も高くなく、眼鏡をかけたいかにも日本人つて感じの自分とは違う人達だ。

鏡だつて、いかにも日本人なんだけど、彼等に上手く溶け込んでる。そこが鏡らしいところなんだろうけど。

俺は視線を品に戻した。

大きな身体だつた。

抱き締められた感覚がまだ残っている。

意識してしまったのかな。でもあんなカッコイイ人に抱き着かれたら当然だろう。

「藤原くん？」

離れたから気を抜いて近くにあつたペーパーナイフに手を伸ばした時、背後から声がかかった。

また心臓が跳ね上がる。

「あ、はい」

振り向くと、目の前にユージンさんが立っていた。

近くで見ると、本当にモデルみたいな人だな。

「緊張してるね」

「いえ…」

「外国人苦手？」

「いえ、そうじゃないです」

そこは否定した。

「驚いた？」

「…はい」

「だよ、突然抱き着かれたんだもんね。ホントごめん」

「いえ。もう一度謝っていただきましたから」

彼は笑みを浮かべながら更に近づいてきた。

「優しいんだ。いい人だね」

「そんなことないです」

「それに可愛い。ね、鏡の友達って言ったけど、俺とも友達になつてくれる？」

「え？ ええ別に…」

随分と人懐こい人だな…。

「よかつた。じゃ、メルアド交換しよう。俺、まだ日本に友達があまりいなくてさ」

「あ、はい」

携帯電話を取り出し、赤外線でアドレスを送る。自分の携帯電話にも彼のが届く。

アドレスと電話番号と、ユージンの名前。

「ユージン…、何ていうんですか？ 下の名前は？」

「ん？ ユージンでいいよ」

「でも…」

重ねて訊くと、彼は微笑んだ。

「秘密なんだ」

これは拒絶の笑みだ。

「はあ…」

苗字を言いたくない理由でもあるのだろうか？ でも、嘘をついてごまかしたわけではなかった。それ

はいい。

嘘をついてごまかされることは好きじゃない。

人懐こいのに秘密を持っているなんて、変わった人だ。

「おい、オトモダチ。コーヒー淹れてやるからこつちに來な。ユージン、お前もだ」

夏八木さんが、俺達を呼ぶ。

「はい。行こう、藤原くん」

返事をする、しごく自然に彼は俺の背に手を回し、行こうかと促した。